

Muriel Spark の小説における時間の移動

小 辻 梅 子

I

ミューリエル・スパーク (Muriel Spark 1918～) にとって、ローマ・カトリック教への改宗が人生における一大転機であったのは言うまでもないことであるが、小説を書く上でも、それは重要な意味があった。スパークはこう言っている。

私は1954年にカトリックになりました。私の著作と改宗のあいだには関係があると思いますが、そのことであまり論理的なことを言う気はありません。いい作品ができたのはたしかにそれ以後のことです。¹⁾

長編第1作『慰める人々』(*The Comforters* 1957) 以来、スパークは自らの改宗をめぐる宗教の問題を取り上げて作品を数多く書いてきたが、第8作『マンデルバウム・ゲイト』(*The Mandelbaum Gate* 1965) では、宗教と時間の問題について「時間の問題が完璧になれば、その時宗教も、時間と同じように、解決されるでしょう」²⁾ と述べている。

スパークは時間の魔術師と呼んでもいいくらい、時間を細分化し、時間の順序を入れ替えて、あたかもカードを切るかのように時間を巧みに扱う。それは「ポートベロー通り」("The Portobello Road") のような短篇や『ミス・ブrouディの青春』(*The Prime of Miss Jean Brodie* 1961) のような比較的短い小説では効果を上げる手法であったが、彼女の小説の中ではもっとも長い『マンデルバウム・ゲイト』では時間の扱いに苦慮したことが如実にあらわれている。

『マンデルバウム・ゲイト』(の取材) には、イスラエルで2ヶ月費やしました。執筆にも長い間かかりました。『ミス・ブrouディの青春』は8週間でした。『マンデルバウム・ゲイト』はずっと長くて、書くのに大変緊張しました。一時は数ヶ月も中断しなければなりませんでし

た。・・・これは私にとってとても大切な本です。(ほかの本よりもずっと) 具体的ですし、非常に詳細な舞台にしっかりと根付いているからです。³⁾

もっともこの作品は分量が膨大なだけではなく、そこに盛り込まれた問題も自己確立の主題を縦糸にして、人間の心理・生理・社会それに宗教・道徳の問題を横糸として絡めたいわば全体小説なのだから、それを時間によって統合しようとする試みがいかに至難の業であるかは想像に難くない。

『マンデルバウム・ゲイト』には4つの層の時間があると考えることができる。①キリストの時代から現代にいたる歴史的事実の時間、②小説の中での事件や事柄が現在進行の形で起こる「表層」の時間、③「語り」の時間。それは作者の語りの時であり、また登場人物たちの意識の流れの時間でもある。④「表層の下にある万物の本質の内部における超自然的な動き」(199)の時間である。

小説の中で大部分を占めているのは②と③であるが、②の表層の時間と④の「万物の本質の内部」の間に③の「意識の流れ」の時間が介在し、③を通していかに④に到達するかを追究し、解明しようとするのが、この小説の目的だとも考えられるのである。

そこで、Ⅱでは主要な登場人物の一人であるフレディ・ハミルトン(Freddy Hamilton)の記憶喪失という事態と、彼と母親の間で交わされた書簡を通してスパークの時間を軸とする小説作法のメカニズムに迫ってみたい。さらに、Ⅲでは主人公バーバラ・ヴォーン(Barbara Vaughan)の「意識の流れ」を通して彼女の変容願望とその達成の過程を追究する。

Ⅱ

小説『マンデルバウム・ゲイト』における現在、つまり②の表層の時間は1961年の夏である。フレディはイスラエルの英国領事館に勤務する外交官だが、週末になるとイスラエルとヨルダンを隔てるマンデルバウム・ゲイトを通過してヨルダン側にある英国人のカートライト(Cartwright)夫妻の家へ出掛ける。彼はタクシーを使わず、いつも歩く。「あなたはなぜマンデルバウム・ゲイトからカートライト家まで歩くのですか。アラブ人の運転手つきのシボレーでわずか10シリングじゃありませんか」(59)とアラブ人の友人アレクサンドロス(Alexandros)はいぶかしがる。

フレディはなぜ歩くのだろうか。父や伯父たちもタクシーは使わなかった

し、チップをやるのに反感を抱いているというのが、彼の答えなのだが、彼が歩くのは2千年前キリストが、ゴルゴタの丘つまり聖墳墓教会へと十字架を担いで歩いたヴィア・ドロローサ（悲しみの道）なのである。フレディにはキリストのイメージが濃密に貼り付けられている。ここには②の表層の時間と①の歴史的時間と④の超自然的な動きの時間が重なり合っている。彼はアレクサンドロスの店にある「青と褪せた金の単調で地味な聖母子像」(58)がひどく気に入っている。青は「万物の本質の内部」を、超自然の神秘を象徴する。死海の方向(45)もガリラヤ湖もシリアの山々(48)も青である。そして彼が大好きな老僧の衣の色も青なのだ。このポッターズ・フィールドに住む「驚くほど弱り切っている老僧」は「いかにも精神の深さを思わせる光っている目ばかりが今にも折れそうな手足にかろうじて生命の通っていることを感じさせる」。「すべての人々の心の中に神を見、誰にたいしても恍惚とした畏れの表情で接する老僧」(134)の「霊そのもののような骨と肉」(135)をつつんだ青い僧衣をちらりと見た時、フレディは青い僧衣という「表層」を通して「霊そのもの」つまり「万物の本質」を垣間見たのである。彼はその時直感的に真実に達し、自分の人生の意義となすべきことを悟る。すでに理性によって到達していた決意を思い出したかのように、彼はカートライト家に引き返して荷物をジッパー・バッグに詰めると、アレクサンドロスの店に向かう。そこで彼は、英国のハロゲイトから彼を遠隔操作している老母からの手紙とそれへの返事を便所に流す。その行為の後彼は「まるで世界と一つになった心持ちがして、そういう自分に敬意を感じる」(201)のである。

じつはフレディの変容の兆しはその日の昼にあった。彼と同じホテルに滞在している英国人の女教師バーバラ・ヴォーンが、聖地巡礼のためにヨルダンに入国したので、ユダヤの血が混じっている彼女がヨルダンにいるとその身に危険が及ぶことについてカートライト夫妻と議論をしていた時、フレディは聖書のヨハネの黙示録を引用してマット(Matt)・カートライトにくっつかかった。それは数日前、何事にもなまぬるいフレディ自身にたいしてバーバラが投げつけた文句だったのである。

わたしはあなたの行いを知っている。あなたは、冷たくもなく熱くもない。むしろ、冷たいか熱いか、どちらかであってほしい。熱くも冷たくもなく、なまぬるいので、わたしはあなたを口から吐き出そうとしている。(21) 4)

この言葉を投げつけられた時、フレディはバーバラのことを「激情家の独身女性」(21) だと思ったのだが、今この老僧の住むポッターズ・フィールドでこんどは彼が「激情家」に変容するのである。フレディはアレクサンドロスの助けを借りて修道院からバーバラを救出し、アレクサンドロスの愛人スージ (Suzi) の助けで彼女をジェリコの家にかくまう。

「自分はまるで夢遊病者か記憶喪失者のように、なかば眠っているような人生を送ってきた」(222) ような気がして、アレクサンドロスとスージの情愛について考えながら、フレディは人生は愛だをつくづく思うのである。そして彼はジェリコの家でスージとの愛のひとときを持つのだが、「まるで記憶喪失者のように」と言っていた彼がほんものの記憶喪失者になり、バーバラ救出のこともスージとの愛の交歓も忘れてしまう。「彼女 (バーバラ) が修道院から姿を消したのとおなじ日にぼくはぼく自身から姿を消した」(127) のである。

魂が肉体の中で、血のようにかけめぐっている間は記憶は鮮明に蘇りつづけるだろう。しかし、フレディの魂は肉体を抜け出してしまい、記憶は失われてしまったのだ。

バーバラが修道院から抜け出した日、つまりフレディが彼女を救出した日は8月13日日曜日未明だが、彼はその前日の土曜日の午後から火曜日の昼過ぎまでの記憶を失ってしまうのである。フレディの記憶喪失の原因が「日射病」によるものか、「海岸病」(121) によるものかは定かではないが、3週間後にその一部が戻って来る。その引き金になったのが、英国のハロゲイトからの衝撃的なニュースである。

79歳の彼の母が、日頃不仲だった70歳近い発狂した女中に刺されて死んだのだ。フレディの魂は肉体から抜け出してしまい血のように循環するのを停止していたのだが、魂が外部の流血事件と呼応して再び血のようにめぐりはじめ記憶が戻ってくるのである。これを契機に彼は少しずつ記憶を取り戻すが、完全に戻るまでにはなお数年を要する。

彼の記憶が少しずつ戻ってくる様子は次のように描かれている。

…はじめは脈絡のない切れ切れの思い出の連鎖でしかなかった。…さしあたり蘇ってきた切れ切れの具体的な事実は、多少とも歪んでいた。人間の記憶というものは普通そういう形で構成され成立しているのである。(130)

はじめはほとんど致命的と言える程なのにしかし命を奪うまでには至らない程度の電気ショックのように——やがてこんどは蓄積された数々の印象の分子がびっしり詰まった不可知の雲のような姿で、そしてさいごには手がかり全体のモザイクを考えてみて、事件のさまざまに彩られた断片を寄せ集め、脱落部分を埋めてみるところまで来た時、・・・記憶は年月のふるいがかかるに従って徐々に明晰になってきたのである。
(141)

局と局が混戦しているラジオのダイヤルを回すように彼は心の針先をあわただしくあちこちへ動かして記憶の世界を尋ね回った・・・(191)

まだ引き潮の力も消えてはいず、こまかいことは流失してしまったものの、やがてひたひたと満ち潮のように記憶が戻ってきた・・・(240)

フレディは具体的な事実を断片的に思い出しながら、モザイクの全体像を考えて少しずつ記憶を取り戻していく。その一つ一つの事実を思い出させるきっかけになるのはハロゲイトの流血の惨事であって、「フレディの母が年寄りの女中のミス・ベネットに刺されて死んだというハロゲイトからの知らせ」「彼の母が死んだ、ベニーに殺された、気の狂ったベニーに刺されて出血多量で死んだという知らせ」がリフレインのように繰り返される。

フレディが彼自身から姿を消したきっかけは、老僧の青い僧衣を見たことだった。青の色に誘われて、彼の魂は肉体から抜け出して永遠の層への旅に出たのだ。フレディが再び彼自身のところに戻ってくるきっかけになる色は赤である。「今日の彼女は赤いドレスではなかった」(228) これはフレディの母が殺されたという知らせが届いた日のカートライト夫人ジョアナ (Joanna) の服についての記述である。彼女はなぜこの日赤い服を着ていないのか。赤い服を着ていないことが特筆に値するのだろうか。その謎が判明するのは約60頁後のことである。「彼女は赤いリネンのドレスを着て、肩から白いカーディガンを羽織っていた」(290) ジョアナが赤いドレスを着ていなかったのは9月5日火曜日のことであり、赤いドレスを着ていたのはその前日の月曜日なのである。ここでは時間の順序が逆になっていて、読者は時間を逆にたどることになる。前日は赤いドレスを着ていたが、今日は赤いドレスではなかった。前日の赤いドレスがとくに印象的であったのは、その日ある事件があったからである。前日9月4日の朝ジョアナは5時に起きて、

ポッターズ・フィールドに野草を摘みに出掛けている。その時の服装が「赤いリネンのドレスに白いカーディガン」なのである。ポッターズ・フィールドはその領有権をめぐるイスラエルとヨルダンが争っている境界の地であり、ここに立ち入る者は双方からの攻撃の危険にさらされるのである。ジョアナの赤い服は格好の標的となり、彼女の後を追ってきたフレディもともに銃撃戦に巻き込まれる。二人はかろうじて命拾いし、ジョアナの赤いドレスは直接流血を引き起こしはしなかったものの、赤い色はハロゲイトの流血事件の予兆だったのである。つまりジョアナの服の赤い色は血の赤い色へと連なり、その血がフレディの記憶を呼び起こすのである。そしてそれがキリストの血のイメージへと連なる。

青い聖画に魅せられたフレディは、青い僧衣によって「万物の本質」への旅を促され、日差しの強い「悲しみの道」を歩いて記憶喪失に陥り、赤いドレスによって現実への覚醒・回帰をする。「人身御供になってハロゲイトの祭壇に身を捧げる気などなかった」(132) 彼が、職を辞してハロゲイトに帰る決心をする。それも母の面倒を見るためではなく、母を殺した女中の面倒を見るためである。

フレディの記憶の取り戻し方はスパークの小説作法に酷似している。具体的な事実の断片を作りながら全体像をイメージし、空いている小さな部分に断片をはめ込むという小説作法がこの小説ではとられているからである。スパークの小説は一筆書きで書かれているわけではない。ジグソーパズルのようなモザイク画である。しかも小片の面積はしだいに小さくなり、点描画の様相を呈してくる。

三一致の法則は守られていない。時間も場所もストーリーも切れ切れに分断されあちこちに飛び、順序はばらばらである。遅い時間が先にはめ込まれ、先の時間の出来事が後で知らされる。フレディの記憶喪失を読者に知らせた時点で、作者は小説作法の手の内を一部読者に明かしたと言えるかもしれない。

この小説は二部全7章からなり、第一部が第1章から第6章まで、第二部が第7章のみ、という構成になっていて、フレディの記憶喪失が読者に知らされるのは第4章である。それは彼の書きかけの手紙を、彼のアラビア語の個人教師であるスージの兄のアブダル (Abdul) が盗み見るという形で読者に知らされる。

・・・たとえ二日間でも記憶を完全に失ってしまうと、後では何も考

えられなくなります。・・・日曜日の午後にマンデルバウム・ゲイトから歩いてホテルまで帰って来た時には、やはり暑くて疲れていました。ところがその日は火曜日だ、みんなぼくの行方を探していた、というのです。おそらく日射病にやられて記憶が狂ってしまったのでしょう。(87-88)

このジョアナあての手紙をアブダルが盗み見るのは8月17日のことである。記憶にない二日間とは8月13日と14日のことであるが、この二日間のフレディの冒険の詳細について読者が知るのはもっと後の第二部である。従ってこの箇所は未来を先取りした一種の"flashforward"なのだが、これにスパークは書簡の往復を絡めているのである。フレディは週に一度手紙を書く習慣を30年もつづけている「手紙魔」で、その相手は主としてハロゲイトの母親であり、ヨルダンのジョアナである。

母親との手紙のやりとりに関して見てみると、彼は第3章において8月11日金曜日にカートライト家で手紙を書いている。この時「表層」の時間にフレディは書くという行為をしているが、彼の意識は絶え間なく異なる時間、異なる場所へと流れている。

つぎに手紙が「表層」に登場してくるのが第4章で、8月17日木曜日にフレディが書きかけている手紙をアブダルが盗み見る場面である。第5章では前日の8月16日水曜日に母親から手紙が来たことが述べられている。それゆえ第4章でフレディが書いていた手紙はこれへの返事なのである。読者は返事の方を先に読まされるというわけである。

さらにその6頁あとで、8月11日にカートライト家でフレディが受け取った手紙が紹介される。読者は新しい手紙を最初に読み、次々にさかのぼって古い手紙を読むことになる。しかも8月11日に受け取った手紙とそれへの返事はアレクサンドロスの店の便所に流され、つぎに手紙に相当するものとして登場するのが9月5日の「とうてい信じられない電報」(240)である。これによってフレディと母親との書簡の往復は断絶する。フレディと母親との間で交わされた手紙は時間的順序に従えば、(ア)8月11日に受け取った母親からの手紙、(イ)8月11日にフレディが書いた返事(投函されず、便所に流された)、(ウ)8月16日に受け取った母親からの手紙、(エ)8月17日にフレディが母親に書いている手紙(アブダルがジョアナあての手紙と一緒に見た)、となるのに、読者には(イ)→(エ)→(ウ)→(ア)の順に呈示されている。

8月16日に受け取った母親からの手紙を読んで、

あらかた何が書いてあるのか、さっぱりわからなかった。しきりに「この前出した手紙」のことが出てきて、・・・母さんはその手紙を出し忘れたのだ、いや書いたのかどうかもあやしい、どうせそうに決まっている、とフレディは思った。(125)

フレディは自分の記憶喪失を棚に上げて、母親の毫碌のせいになっているが、読者もフレディと同じ混乱を体験させられるのだ。

Ⅲ

登場人物たちの意識は絶え間なく流れて、数時間前、数日前、数十年前、あるいは個人的には体験したことのない数千年前にまでさかのぼったり、またまだ経験したことのない、作者のみが知る未来にまで及んだりする。

小説の第2章で、主人公のバーバラは次のように考えている。

わたしの精神はその身体から逃げ出してどこか別の地点へ行きたがっている。だが、それは永遠の変容の地点だ。さしあたり、記憶は血のように循環を続けている。このまま循環を続けて、すでに息絶えた事実が蘇り、心の担うものすべてに命を吹き込んでくれることを祈ろう。(31)

ベルクソンによれば、「身体は思惟に輪郭を与えるために役立つが思惟を構成しはしない。・・・人は自己の身体によって回想するのだが、魂によって記憶する」⁵⁾

バーバラの精神は身体の桎梏から抜け出して永遠の中に入りたいと願っている。しかし当面の間魂によって刻まれた記憶を回想する。現在つまり②の時彼女がいる地点はタボル山の山頂である。ここは2千年前に「キリストの変容」(Transfiguration)があったとされる場所である。

イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。見ると、モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた。・・・光り輝く雲が彼らを覆った。すると、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」という声が雲の中から聞こえた。・・・一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中

から復活するまで、今見たことを誰にも話してはならない」と弟子たちに命じられた。⁶⁾

いま現在バーバラはキリストの変容の場にいるが、彼女の魂は身体の中に閉じこめられ表層の時間に縛られている。「現在」は1961年夏8月のある日である。バーバラは婚約者のハリー（Harry）を追ってイスラエルに来ているのだが、考古学者の彼は国境の向こうのヨルダンで死海文書の調査をしている。1961年現在において、聖地エルサレムはイスラエル側とヨルダン側に分断されており、両側を隔てている関所がマンデルバウム・ゲイトなのである。

それはおよそ門の名に値しない、ただ二つの小さな警備所にはさまれたエルサレムとエルサレムの間のわずかな距離の道路で、そのイスラエル側にある家がマンデルバウムという人物の持ち家だったために、そう名付けられただけの門だった。(304)

タボル山はイスラエル側にあり、バーバラが婚約者と会うためにはマンデルバウム・ゲイトを通過してヨルダン側へ入国しなければならない。外交官のフレディにとってはこのゲイトを通過することはいともたやすいことであるが、バーバラの場合はそうはいかない。彼女の父親は英国人だが、母親がユダヤ人なのである。ユダヤの血が半分入っているため、アラブ・イスラエルの対立の厳しいこの地で、イスラエル側からヨルダン側へ入るのは危険なのだ。しかし周囲の心配をよそに、バーバラはいとも簡単にマンデルバウム・ゲイトを通過する。彼女はイスラエルのヴィザのついてない別のパスポートを持っていたし、カトリックとしての洗礼証明書も持っていたのである。

父方が英国国教徒、母方がユダヤ教徒のバーバラだが、彼女自身はカトリック教徒なのだ。カトリック教は彼女が選び取った宗教なのである。バーバラにとってカトリック教の魅力とは「人間を行動にいざなう動機の複雑性を認め、その結果、現実の言葉と思想と行為を重視するという点」(161)である。エルサレムはキリスト教の発祥の地であり、ユダヤの父祖の地でもある。バーバラにとっては血と魂のふるさとなのである。精神が身体から解放され、永遠の層における変容の地点へ到達するためには、どうしてもエルサレム全域へ、しかもキリストに関する聖地の多いヨルダン側へも行かねばな

らないのである。

バーバラはキリストが重要な教えや奇跡を行ったイスラエル側のカペナウムで人間の精神の解放がここから始まったことを確信する。そして彼女自身が精神の解放を実感するのはヨルダンでの宿泊先の修道院からフレディによって救出された後である。

こんど中東へ来て以来、彼女は今はじめて自分の中の矛盾を超えて一体になれた気がした。キリスト教徒でありながらユダヤ人。ヴォーン家の血とアーロンソン家の血。二つの間の違和感は消えていた。(164)

あれは単なる修道院からの脱走ではない、わたしは魂を束縛している正体不明のものから逃れてきたのだ。(165)

だが、バーバラの受難が始まるのはこれからである。受難は表層の生活の中断であり、意識の流れの裂け目である。彼女は修道院で猩紅熱に感染したため、聖地巡礼の旅を中断せざるを得なくなり、ジェリコの家に隔離される。この間に彼女の宗教的転機が訪れる。

熱を出してこんな具合に寝込んだいたおかげで、バーバラ・ヴォーンは一つの宗教的転機に出会ったのである。心から神の愛に身をゆだねるようになった彼女にとっては、この世にありえないことは何一つなかった。(263)

2週間の隔離期間を経て、宗教的転機を迎えた後、バーバラは念願の聖地巡礼を続ける。聖地巡礼の旅をしている間に、彼女はすっかり解放され、明確な目的意識を持つようになるのである。

謎というものは、かならずしも解かねばならないものではない。疑問というものはそのままそっとしておくだけで美しい、それ自体で答えなのだ。あれだけの苦労をしたあとで今巡礼の旅をしているということはどういうことなのか。それはわたしがわたしだからだ。(277-8)

自分の内部に諸々の矛盾対立を抱え込んでいたバーバラが、謎は謎として残しながらもそれらを包含・統合した、わたしはわたしであるという自己確

認の旅はこれで完成する。彼女の精神は諸々の矛盾を乗り越え、桎梏から解放され、永遠の層における変容を成し遂げたと言えよう。

IV

物語の中で一時的に過去にさかのぼるフラッシュバックや、未来に起こる出来事を前もってちらりと見せるフラッシュフォワードは、スパークがさかんに用いる手法である。『マンデルバウム・ゲイト』では、第一部でバーバラの回想にフラッシュバックが用いられ、第二部においてフレディの記憶が失われた二日間のことが語られる部分でフラッシュフォワードが多用されている。

フレディはジェリコの家で同僚のガードナー (Gardnor) の妻ルース (Ruth) を見かけるのだが、数週間後、この夫婦がイスラエル側の情報をアラブ側に流しているスパイだったことが発覚、ガードナーは逮捕され裁判にかけられる。そのことが先取りで述べられるのである。

また、バーバラはジェリコの家で回復期にあった頃エネルギーを持て余して家の中を探索していた時、ある部屋に迷い込む。そこには彼女が英国で教師をしている学校の校長で親友のリッキー (Ricky) と、アブダル、スージ兄妹の父ジョウ・ラムデズ (Joe Ramdez) が同じベッドで寝ていたのである。その場面で、バーバラとハリーの結婚を妨害するためにエルサレムまでやってきたリッキーが、後でラムデズと共謀してハリーの洗礼証明書を偽造しバーバラに送り付けるのだが、皮肉なことに逆にこれが二人の結婚を可能にするという未来のことが述べられている。

小刻みな時間の移動と、フレディの記憶喪失とバーバラの猩紅熱という、登場人物たちを一時的に表層の時間から断絶させるという手法は、たしかにデイヴィッド・ロッジ (David Lodge) の言うように「読者の注意をテキストの技法的構成に引き付けることによって、読者が架空の物語の時間的連続体や中心人物の深層心理の中にくはまり込む>のをあえて防ぐ働きをする」⁷⁾が、読者は時間と場所の迷路の中に迷い込み不安になってきて、時間的連続体や中心人物や三人称の語り手といった拠り所を求めたくなるのも事実である。

作者自身はのちにこの小説は構造上バランスを欠いていると考えるようになる。「釣り合いがとれていません。はじめはゆっくりで、終わりはとても速いのです」「長い本は二度と書かないことに決めました。短い肝要」⁸⁾ 決心どおりこれ以後のスパークの作品は短いものばかりである。

ともあれ、『マンデルバウム・ゲイト』が、小説の手法とテーマ性の統合を意図した意欲的な「野心作」⁹⁾であることは間違いない。

注

- 1) Joseph Hynes (ed.), *Critical Essays on Muriel Spark*, New York : Macmillan Publishing Company, 1992, p. 25.
- 2) Muriel Spark, *The Mandelbaum Gate*. First published by Macmillan 1965. Harmondsworth : Penguin Books, 1967, p. 199. 以下本書からの引用は文中に頁数を記す。なお日本語訳は、小野寺健訳『マンデルバウム・ゲイト』（集英社 1997）を参考にさせて頂いた。
- 3) Quoted by Peter Kemp, *Muriel Spark*, London : Paul Elek, 1974, p. 112.
- 4) 「ヨハネの黙示録」3 : 15~16 『聖書』新共同訳 日本聖書協会 1987.
- 5) ジャック・シュヴァリエ 『ベルクソンとの対話』中沢紀男訳 みすず書房 1969, p. 336.
- 6) 「マタイ伝」17 : 2 - 9 前掲『聖書』
- 7) David Lodge, *The Art of Fiction*, 1992. 『小説の技巧』柴田元幸・斉藤兆史訳 白水社 1997, p. 111.
- 8) Quoted by Kemp, p. 112.
- 9) John Updike, "Topnotch Witcheries". Hynes, p. 209.